

ときました。IA

for ADULTS ONLY.

Presented by ORANGE☆CHANNEL



はじめましてこんにちは。アル・ラ・ウネです。今回は前作に引き続き、超電磁砲です。なんとなくやり残した感があったので、もう一冊作ってしまいました。

今回は原作を尊重してビリビリをルーズソックスのままにしましたが、せっかくの同人だし、好きにしまえ！ということで、紺ハイソにしてみました。

やっぱり似合うと思うんですけどねー。ルーズの方がいい、という方にはゴメンナサイ。

あと、絵の仕上げ方をちょっと変えたので、印刷するとどんな感じになるのか、少し不安でもあります。ぼやけた感じになっちゃわないといいんですけど。

ともあれ、相変わらずいきなり始まってますが、どうか見てやってください。

ビリビリ！
今からお前を……

抱くぞっ！



ええっ!?



「まずはしゃぶってくれ！」

そう言い放ち、ペニスを美琴のふっくりとした唇に押し付ける。

「んなっ……んぐっ！」

美琴が何かを言おうと口を開いた隙に、亀頭を口内に滑り込ませた。

「んっ、んぐっ……っ！」

美琴のぬめった舌が亀頭にまとわりつく。しばらく温かい口内の感触を愉しんでいると、あまりの気持ち良さに、危うく暴発しそうになる。

「うわ…やばっ……！」

慌てて美琴の口からペニスを引き抜いた。「んあ…っ、な…何よ、もう射精寸前だったの？

自分で突っ込んだいて何なのよ、もう……」

美琴はとまどいながらも、少し強気な口調で不満げな声をあげる。

「す、すまん、本番はもっと頑張るから……」

「そう…？ って、そういうことじゃなくて！」

そんなことは構わず、美琴をベッドに寝かせる。

ドキドキドキ...

ひらっ♡

「今日は紺ハイソにしたのか」
「あ、あんたがこっちが
いいって言ってたん
じゃないの……！」

ちょっ

……
……
……

「でもまあ、べ、別にあんたが言ってたから
はいてきたわけじゃないけどね……！」
たまたまよ。たまたま！」
まさに典型的なツンデレ台詞を吐き、
テレをごまかそうとする美琴。
「な…、何 にやにやしてんのよっ！
違うって言ってんでしょ！」
「ハイハイ、わかったよ」
そう言いつつ、するっ、とバック
プリントのショーツを脱がせる。

「ちょ、ちょっと……っ、
どさくさにまぎれて何してんのよ!?!」
あせる美琴の顔を見つめながら、
柔らかい太股にペニスを押し付ける。
そして……。

「あ……、ま、待って……！」





熱っっっ♡♡♡

ちゅっ♡♡♡
ちゅっ♡♡♡

太いペニスが出入りする度、くちゅ、くちゅ、と卑猥な音が鳴る。
「お前ん中、もうぐちよぐちよだな……すげえエロイ音がするぞ」
「い、言うな……っ、恥ずかしいんだから……っ！」
言葉とは裏腹に、美琴の花弁の奥からは、蜜が止めどなく蜜が溢れてくる。
入口は泡立ち、白濁した愛液が陰囊まで伝う程、美琴の肉壺はぬめり、濡れそぼっていた。

音がする度、美琴の身体が震える。限界に近いようだ。汁が飛び散り、音も大きさを増す。
「イキそうなのか、ビリビリ……っ」
「ち、違……う……っ！」
「俺はもうイキそうだ……！」
「！ ……っ……んんっ♡」
さらに激しく腰を動かす。龟头をさらに奥深く突き入れ、何度も子宮の入口を叩く。
「イクぞ……ビリビリ……っ！」
「やっっっ、ちよっっっ！
な、中は……っ！ ダメ……っんあっっっ あ……っ♡」

ぬっ
130
ぬっ
130
ぬっ
130

ドクン……ッ！

膈内に、粘り気の強い精液が、放出される。

「ふあ……っ♡ ち○ほ、びくびくって、
震えてる……っ！ あ……っ……出てる……！
精液、出てるっ♡」

美琴の膈も、精液を全部吸い出すかのように、
ひくん、ひくん…と、何度も収縮を繰り返す。

あ♡♡

粗方精液を出し終わると、ゆっくりと、
ペニスを引き抜く。

精液にまみれた陰茎が美琴の膈内から、
ぬるぅ……と、徐々に、抜けていく。

「うあ……♡ ダメっ♡

今、抜いたら……っ、出ちゃう……っ！」

「え……？ 何が出るんだ…？」

「何って……っ、そんなのっ…！」

構わずペニスを引き抜いていく。

「やっ♡ 動かしちゃやっ……♡

だめ！出ちゃうっ！」

美琴は脚をばたばたさせて抵抗するが、
ペニスは抜けていく。

そして、一番太いカリの部分が
抜けた瞬間……！



ふぁっ……♡
みっ♡
見せてあげる♡♡

あっ……♡
あっ……♡

美琴の股間から、勢い良く液体が噴き出した。
「あっ♡やっ♡ 見ないでっ♡
見ないでえっ……っ♡」
そう言われても……これは凝視せずにはいられない。

相当溜まっていたらしく、液体はしばらく出続けた。

精液の糸を引きながら、膣から龟头が抜ける。抜けた龟头に温かい液体がかかり、根元までの方までつたう。

美琴は最絶頂の快楽で身体を震わせながら、うるんだ瞳でこちらを見つめ、とがめるようにつぶやく。
「だ、だからっ……う……っ、動かさないでって、言ったのにいっ……っ♡」
「あ……、す、すまん……いやまさか、こんなことになるうとは……」
想定外の出来事に、なんとなく悪いことをしたような気持ちになる。

「でもまあ……可愛かったけどな」
「……！ バ、バカっ、何言ってるのよ……っ！
は……恥ずかしいじゃない……！」
照れて目をそらす美琴はもっと可愛かった。



少し落ち着いた美琴は、改めて股間を見やる。
ペニスの抜けた膣内からは、大量の精液が流れ出している。

「ん……っ、もお……こんなに出して……
あたしん中、まだあなたの精液でいっぱいよ……
出し過ぎなんじゃないの……？」

「そりゃ、一週間溜め込んだ精液だからな！」

「一週間！」

少し驚いた顔でこちらを見る。
「それに……ビリビリの、すげえ気持ちよかった
からな」

「……そう、なん、だ」

複雑な表情をする美琴。

「まあ……そう言われれば、悪い気はしない
けどさ……」

そう言い、再び目をそらす。
照れるときは目をそらす。まさに基本。

まだ、膣から溢れ出る精液。
本当にたくさん注ぎ込んだようだ。

「おかげで一週間分の精力、全部搾り取られちゃったよ」

「何それ、まるであたしが悪いみたいじゃない」

「ははは」

悪くない、どっちかつと、良い。
しかしそれを言うとまたしばらく目を合わせて
くれなくなるので、心の中でつぶやいておいた。

・
・
・

「じゃ、またね」

「おう、……んじゃ、今度会うときは、
セーラー服でよろしく！」

「死ね！」



佐天は大きく勃起したペニスを握りながら、少し狼狽していた。

「すご…… お、おじさんのち○ぽって、こんなに大きかったっけ……？」

大人のペニスを見るのはこれが二度目だ。

「前もこんなだったよ。」

「そ、そうだったっけ？ 参ったなあ……」

苦笑いをしながら、長い竿の部分で指でさする。「このままだと佐天さんが辛いから、しっかりと濡らしておかないとね」

「そう、だね……じゃあ」

佐天は男の目を見つめながら、龟头をゆっくりと口に含む。

「ん……」

そのまま竿の半ばまで徐々に口内に入れていく。

(これ以上は無理……！)

根元までくわえるのは諦めて、龟头を重点的に攻める。

「うおっ……佐天さん、フェラ、ウマすぎ……！」

「ほ、ほお？ (そ、そお?)」

龟头を頬張りながら、返事をする。

さらに裏筋、鈴口を舐め回し、男の性感帯を的確に刺激していく。

指を使い、カリの部分もこするように刺激を加える。

佐天が尿道口に唇をつけ、カウパー腺液を吸い上げていると……

「ヤバイよ佐天さんっ！ も、もう……！」

その時、男の身体がぶるっ、と震える。

「顔に出すよ……！」

「へっ？」

うやあ……

じ……

ん……♡



佐天の顔に、精液が放出される。
「うわっ、びっくりしたっ！
やだ、初めてぶっかけられたっ！」
そう言う間に、顔中精液まみれ。
「あ……嫌だった……かな？」
男は申し訳なさそうに言う。
「うへん……髪にかかるのはちょっと
イヤかも……」

しかし、自分の顔が、精液でべとべとに
なっている様は、ちょっとおもしろかった。
頬を伝い、丁度唇のところに垂れてきた
精液を、舌で舐め取る。

「……ほんのり塩味……」
「え？」
「いえっ！何でもありません！」

キヤッ??

佐天は顔や髪の精液を拭き取り、
再び勃起した男根と向かい合う。
「佐天さん、ち○こも充分ぬめった
ことだし、そろそろ……」
「あ……うん、いいよ」

男はショーツと割れ目との間に、
肉棒を挿し込む。
佐天は反射的に太ももを閉じた。
熱い脈動が太ももに伝わってくる。
(こ、これが……こんな大きいのが、
今からあたしの中に……?)
佐天の鼓動が速くなる。
「それじゃあ、いくよ……」
「は、はい……」
一瞬びくっとするが、すぐに
覚悟を決め、
「ゆ、ゆっくり、ゆっくりで
お願いします……っ！」

大きい……

入るかな……っ

ドキドキ



まだ若く儂げな佐天の花弁に、熱く
たぎった肉棒の、黒光りした先端が
押し付けられる。
そこはもう充分に濡れ、入口の肉は
自ずと亀頭に吸い付いた。

一度しか男を受け入れたこと
のない、淡い桃色の花弁が、
凶悪な肉棒に押し広げられる。
「うあ…っ、ふ、太……いっ!!」
そしてゆっくり、亀頭が佐天の
淫らな肉の中に埋まっていった。
「あっ♡んあ♡は、入って……
きてる……っ! 太いち○ほっ、
あたしの中に…っ、ゆっくり…っ、
入ってきてるようっ……♡」
言葉通り、ペニスは少しずつ、
佐天の膣の奥へと入っていく。

「ダメっ…っ、もうこれ以上入んないよお……っ」
しかし佐天の肉壁は、もっと奥までペニスを誘うかのごとく、
強く男根に絡み付いて離さない。
男は腰を引こうにも引けず、自身をさらに奥へと押しやる。
「やっ……ウソ……っ、入るの?入っちゃうの? あたしの中、
そんな太くておつきくて、かたくて凶暴なカリ高ち○ほ、
全部入っちゃうの……っ!? んん……っ♡」
男のペニスを啜え込み、いやらしく拵がった自分の肉穴の方を
見つめながら、佐天はうめき、あえく。

「佐天さん……っ、すごいよ……すごく気持ちイイ……っ!!」
男は耐えきれず、腰を動かし始めた。
「ふあ…っ、ま、待っ……っ♡」

あ♡

あ♡

入っちゃった……♡

男は激しく腰を動かし、佐天の膣内を己が分身で蹂躞する。

「ダメっ……っ♡ そんなに激しく突かれたらっ……あたしっ……♡」

佐天は懇願するように言うが、男の腰は止まらない。

「やだっ、あたし……っ」

佐天の腰が、徐々に浮いてくる。

それに合わせて男のストローク距離も長くなり、より激しく、より強く、子宮の入口を突く。

「やっ♡ ち○ほっ♡ 深いっ♡ ち○ほっ、それ以上だめえっ♡」

だめだっ♡ち○ほっ♡

だめっ♡

おん……っ♡
ん……っ♡
ん……っ♡

「佐天さん……出すよ……!!」
「んあっ♡ やっ♡ 今、出されたら……っ
やだっ♡ らめえっ♡♡」

ドクンっっ……!!

男の二度目の射精。
二度目とは思えない量の精液が、佐天の膣を満ちし、結合部の隙間から溢れ出てくる。
「んあっ……っ♡ あ……っ♡ んあっ……♡」
佐天の膣内は激しく痙攣し、竿に残った精液まで搾り出そうとする。
「イっっちゃった……っ♡ 大人ち○ほで何度も突かれて……おじさんの精液、いっぱい中出しされて……っ♡ あたし、思いっきりイっっちゃった……っ♡」

男は精液と愛液でまみれた膣内を、ゆっくりゆっくり、ペニスを出し入れして楽しんだ。
佐天の身体は時折ビクンと跳ね、その度に膣内のペニスを強く締めた。

ゾ
ッ
♡

男は佐天の肉壺を、長く、存分に堪能すると、ようやくペニスを引き抜いた。

「あ……抜いちゃうんだ……」

佐天は物惜しげにそうつぶやいた。

男の精液と自分の愛液とでテラテラといやらしく光る男根を、恍惚とした表情で見つめる。

ほおつとしたまま、抜けて丁度足のところにきた龟头を、土踏まずあたりで軽く弄びながら思う。

(もっと……してくれてもいいのに……。)

そんな佐天の思いを知ってか知らずか、男はすでに満足気な表情で佐天の方を見ている。

黙っていても、想いは伝わりそうにない。

「今日は……ずっと一緒にいられるんでしょ？」

「うん、そうだね」

「よし！」

男に飛び掛るように抱きつく。

「じゃあ、もう一回戦行こう！」

佐天は早速、再戦を申込む。

「えっ！」

さっき激しく致したばかりということもあるが、何より佐天から求めてきたことに、男は驚いた。

「だめ？」

佐天は上目遣いで男を見る。うるんだ瞳で。

「だめじゃない」

即決。男と佐天は再び抱き合った。

その後、男は何度も佐天の膣内に射精し、佐天は何度も絶頂に達した。抜かすの連発で、さすがに男の体力は限界だ。

「す、少し休ませてくれよ……」

しかし佐天は人差し指を唇にあて、無邪気な顔で言う。

「だ～め♡」

そして、満面の笑顔でこう言った。

「今夜は寝かせないぞっ☆」

ほお

精液…流れ
出ちゃう…♡

んあっ…♡



さて、あとがきです。まず、最初に一言。

……これは恥ずかしい。

エロい文章を書くというのは、脳内の妄想をそのまま垂れ流してるようなものですね。途中で書いてて死にたくなりましたが、今更後に退けない状態だったので、最後までやりました。う〜ん、とにかく恥ずかしい。まあ美琴と佐天さんいっぱい描けたのでいいか〜。

今回も固法先輩はちょっとしか描けませんでした。少しでも多く描きたいので、裏表紙もエロ絵にするという苦肉の策で、何とか2頁描きました。とりあえずおっぱい描きました。むっちむちやぞ！固法先輩ステキです。

前回と今回で、超電磁砲本が2冊続きましたが、次は何かな？ けいおんかな？ あ、ルリルリ本も作らないと。最優先ですね。

それでは、最後までお付き合いいただき、ありがとうございました！
またどこかでお会いしましょう。

4月某日 アル・ラ・ウネ



もみ……♡
何回出す気……？

あ……♡

どろどろっとききました。

ORANGE★CHANNEL

発行：ORANGE★CHANNEL

著者：アル・ラ・ウネ

発行日：2010.4.29

印刷所：サンクルーフ様

URL：<http://une.neko.ne.jp>

mail：une@neko.ne.jp

おっぱいぬるぬるに
たれちゃった...♡

